

異界の魔術士
3

ヨールテス

商人国家キト代表。
道化師のような風体で、
俗物らしい振る舞いを
しているが……？

ガリウス

名のある門閥貴族の
次男だが、王都から
地方へと飛ばされた
日付きの不良騎士。

ルティレイフィア

レティレスティアの妹。
姫ながら優秀な剣士で、
よくお忍びで諸国放浪の
旅に出る。

ブラット

さんつき さび
『銀月の牙』という傭兵団
を率いる傭兵団長。
冷静沈着で寡黙な男。

アンバツス

フレグンス辺境騎士団の
中隊長。46歳。
みるつもの
無骨な古強者の騎士で、
情に厚い。

アネット

元帝国密偵部隊隊員。
優秀さを認められ、現在は
皇帝の補佐官に。28歳。

バルティア

昨今傀儡より脱却した
グラントゥルモス帝国皇帝。
朔耶をこよなく愛する24歳。

レティレスティア

『精霊の国』と名高い
フレグンス王国の王女。
優れた精霊術士。16歳。

つづきや 都築朔耶

異世界で『発明家魔術士』
となった女子高生。
機械弄りと武道と人をせ
る演技が得意な18歳。

Main Characters
登場人物
紹介

序章

太陽が真上を過ぎる刻。

四頭の竜に引かれたグラントウルモス帝国の大型竜籠おおがたりゅうかごがオールドリア大陸の空を行く。

前方にはフレグンス王国の衛星国家であるサムズ国の紋章が描かれた二頭立ての簡易竜籠が二台、左右並行して飛んでいる。簡易竜籠に乗り込んでいるのは、数人の傭兵達。

彼らサムズの傭兵部隊に制圧された大型竜籠の中では、食堂、貨物室への通路、そして貨物室に二人ずつの見張りが立つ。

四大列強の和平会談に出席した各国の代表達はそれぞれ寝室に軟禁され、食堂と貨物室にはその付き人や部下達が拘束されていた。捕虜には術士か否かにかかわらず、術封じの枷かぎが填められている。食堂より繋がる寝室ブロックの一室にて、母アルサレナと共に軟禁されているフレグンスの王女レティレスティアは朔耶さくやとの交感を終えると、複雑な表情でアルサレナと向き合う。

「母様……」

「どうしました？ レスティア」

「実は……サクヤと交感を繋いでいました」

彼女らの手に填まる術封じの枷は、結界をつくって魔力の循環を抑制し、被拘束者の交感の感知範囲を制限するものだが、朔耶の意識の糸はその結界を通り抜けて来たらしい。

アルサレナは、枷に刻まれた呪文が発動を示す光を放っていた事から、既にそれらのことに気が付いていた。

「やはりそうでしたか、あの子はこちらの世界に？」

「ハイ、精霊の視点を通して私達の危機を知り、その精霊の力で世界を渡ったのだと……」

「そうですか……それで、サクヤは何と？」

先程国境の街カンタクルに来ていたらしい朔耶は、『すぐそっちに行くから』と言って交感を解いた。レティレストエアがその事を話すと、アルサレナは少し考え込む。

帝国に攫われた折、精霊術士として目覚めた朔耶が様々な精霊術を行使してその力の応用範囲を広げていた事は、レティレストエアとの日々の交感を通じて明らかになっている。さらに朔耶が自らの意思で精霊に呼びかけて世界を渡ったと聞いたアルサレナは、朔耶の身に他にも何か大きな変化があったのではと感じていた。

「サクヤも、カースティアに向かっているという事でしょうか……？」

現在、竜籠りゅうかごは和平会談が行われていたカースティアに引き返している。

通常、カンタクルからカースティアまでは、どんなに急いでも半日はかかる。しかし、もし朔耶が精霊術の中でもとりわけ高位な『転移術』を使えるまでになっているとすれば、長大な距離も一瞬で飛び越える事が出来るはずだ。

「でも、カースティアには大勢の武装集団が……」

「ええ。ですが、それはサクヤも把握しているはず。何か考えがあるのでしよう」

とにかく、朔耶から次の連絡があるまで待ちつつ、自分達は現状打開の機会を窺う。不測の事態にも即応する心構えをしておくように、と言いアルサレナは話を締め括った。

第一章 道化師の暗躍

オールドリアの地に君臨する四つの大国。

精霊の国フレグンス、武の国グラントウルモス、知の都ティルファ、商人国家キト。

この四大国の代表らが集まって行われていた和平会談は、グラントウルモス帝国のバルティア皇帝が提案したものである。

帝国を裏から操っていた先代皇帝エイディアスが朔耶に討たれた事により、帝国の全権を掌握したバルティアは、フレグンスをはじめ各国との関係改善を図るため、また先代皇帝が画策していたサムズ国によるフレグンス侵攻の阻止も兼ねて、早期に和平会談を実現させたのだ。

しかし、サムズ国は彼の予想よりも早く侵攻を開始。サムズと同じくフレグンスの衛星国の一つであるクリューゲル国の首都、カースティアの大図書館で行われていた会談は、サムズ独立派を名乗る武装集団に突然の襲撃を受けた。

各国の代表は帝国の大型竜籠おおかたりのうかごにて脱出を図ったのだが、サムズ国の竜籠隊に追撃を受け、乗り込んで来た傭兵達に制圧されてしまったのだった。

「あの……ヨールテス様にお薬を届けたいのですが……」

貨物室を見張る傭兵に、キトの代表団——綺麗どころ親衛隊の女性剣士の一人が声をかける。持病のあるヨールテスは、処方された薬を毎日決まった時間に飲まなくてはならないのだと言う。

傭兵達にとつても代表団は大事な人質。体調を崩されても困るという事で、軟禁してある部屋への立ち入りを許可した。綺麗どころ親衛隊の女性剣士は、実は格好だけ立派な剣士風に整えたほぼ素人集団なので、傭兵達もあまり警戒していなかった。

女性剣士が通路の見張りに連れられて食堂に入ると、壁際に並べられた椅子に枷かたがで括りつけられて座っているフレグンスとティルファ、それに帝国の代表補佐官達の姿があった。彼らを横目に寝室プロックに入り、ヨールテスの軟禁されている部屋の前で足を止め、扉越しに声をかける。

「ヨールテス様、お薬の時間です」

「おお、キルトか。入りたまえ」

失礼しますと言って部屋に入る。

ヨールテスはベッドに腰掛けて寛いでいた。女性剣士——キルトは扉を閉めて気配を探り、外で見張りが聞き耳など立てていない事を確認すると、おもむろにヨールテスの膝またかに跨る。

ふっと表情を緩めたヨールテスは、既に自力で外していた枷を脇にやりつつ、彼女の腰に手を回した。

「どんな様子だ？」

「今のところは、皆さん大人しくしていますね」

ガラリと口調の変わったヨールテスが他の人質達について訊ねると、キルトは貨物室からこの部屋へやって来るまでに見た各国代表の補佐官や付き人達の様子を語る。

「そうか、やれやれ……愚者を演じるのも疲れるな」

「そうですか？　ヨールテス様、ノリノリだったじゃありませんか」

ヨールテスの首に腕を回し、耳元に唇を寄せたキルトは可笑しそうにクスクスと笑う。実は彼女は、綺麗どころ親衛隊の中に潜ませた、本物の腕を持つ密偵剣士であった。

「まあ、他の代表団の護衛が軒並み正義感の強い紳士であってくれたおかげで楽だったがな」

「うっふふ……皆さん、勇敢な騎士様達でしたね」

「長生きは出来なさそうだがな」

そう言っただけでヨールテスは、率先してカースティアに残り代表団と女性達を脱出させた各国の護衛達を鼻で笑い、キルトの首筋に舌を這わせる。彼女の喉からぐもった嬌声が零れた。

「ふむ、また随分と溜め込んだモノだな」

「はい……魔術士の相手が、多かったモノで……んあ……っ」

キルトの首筋から赤い血が一筋、鎖骨の窪みを辿り胸の谷間へと流れ落ちる。鋭い牙で彼女の首筋を穿つヨールテスは、その魔力を自らの体内に吸収していった。

魔術が存在するこの世界では、人間は呼吸をするのと同じように、意識せずとも身体に魔力を循環させている。そのための臓器が備わっている訳ではないが、目に見えぬ魔力の通り道があるのだ。さらにキルトは魔術的な処置によって体内を循環する魔力をせき止め、溜めておく器官を有して

いた。魔力は通常、意識の集中の他に、命を生み出すためのまぐわいによっても一時的にその循環量を増やす事が出来る。キルトは後者の方法で、相手の体内を循環する魔力を効率よく自身の中に取り込んでいた。

「サムズの指導者は小物だが、背後に付いている帝国の元側近か？　奴からは同類の気配を感じる」

「はい……エイディアス帝から……んう……精霊体化実験を……受けた形跡が……はあ……」

溜め込んだ魔力を貪るように吸い出され、キルトは快感に身を振る。彼女を抱きかかえながら、ヨールテスは今回のサムズによるクリューゲル侵攻の黒幕とも言える人物の事を考えていた。

帝国を裏で支配していた闇の皇帝エイディアス・スルート・グランが、傀儡皇帝バルティアに付いたフレグンスの発明家魔術士、サクヤによって討たれたその日。エイディアス帝の側近の中に、帝都城を脱出してサムズに亡命した者がいた。

『魔族』と称される自分達と同じ、異端の気配を持つその元側近にどこまで接近すべきか。

一般的にこの世界の『魔族』とは、邪業とされる異形化や不死の研究を率先して行い、その身を特異な状態に変化——すなわち『魔族化』させた者達の総称である。そして、それらの研究過程で実験に使われた動物が野生化したモノが『魔物』の祖であるとも謂われる。

ヨールテスはティルファで不老不死の研究をしていた学者術士の息子で、体内に呪文を刻むという手法で身体の老化を抑え、寿命を延ばそうとした一派の生き残りであった。加えて彼の場合は、定期的に外部から魔力の補給をする事で体内の呪文を維持している。

一方、エイディアス帝の不老不死研究では、体内に発掘品を埋め込む手法が取られていた。つま

り件の元側近は、体内の発掘品で魔力の集束を早めるという実験を経て『魔族化』した者であった。ヨールテスの側近でもあるキルトは、かつてキトを支配していた闇ギルドに所属する暗殺者だった。当時、キトの裏社会で頭角を現し始めたヨールテスに差し向けられたのだが、色々あって今は彼の魔力補給のための触媒となっている。キルトの魔力を溜め置く器官はヨールテスが施した体内呪文によるもので、彼女はヨールテスの手によって『魔族化』したのだ。

ヨールテスは恍惚とした表情を浮かべてしな垂れかかるキルトをベッドに横たえようと、体内呪文の状態を検査して自らの力を確かめた。その間に、キルトの首筋についた傷がみるみる塞がっていく。ちなみに、この『吸血鬼スタイル』による魔力吸収はヨールテスの趣味であり、別に嘔む必要は無い（うむ、異常は無いな。さて……カースティアの陥落は必至というところだが——さっきの精霊術らしき意識の糸が気になるな）

サムズの反乱を利用し、まずはクリューゲル国全域を紛争地帯にする。ここまではおおむね計算通りに進んでいる。だが、今回の計略は未だかつて無いほど大規模な、国家戦略級のものだ。どんなイレギュラーが発生するやもしれない。

警戒だけは怠らないヨールテスであった。

食堂で拘束されているレイス達は、見張りの傭兵の力量を見定めつつ、来るべき一戦への気概を内に秘めていた。この大型竜籠に囚われている者達は帝国とキトの代表団以外、全員が術者である。誰か一人でも術封じの枷を外す事が出来れば、傭兵達にかなりの脅威を与えられるだろう。

「大丈夫か？ フレイ」

「はい、私は平気です」

気遣う言葉に微笑み返すフレイは、レイスの眼の奥に『やれるな?』という確認の意図を読み取って頷いた。

先程、キトの代表団の女性が食堂を通る際、見張りの視線が逸れた隙を突いて、帝国の皇帝補佐官アネットが合図を送ってきたのだ。彼女は既に外してある自分の枷を見せ、さらに指の間に先の曲がった針のようなモノをちらつかせていた。

食堂にいる見張りの二人は、交代で寝室ブロックと食堂を往復。左右の通路を巡回する二人は食堂で交代を行い、すれ違って反対側の通路へと進む。彼らは短い間隔で交代する事で不測の事態に備えている。仕掛けるなら、通路の見張りが食堂を出た直後を狙うしかない。アネットの開錠の腕と、その後の制圧力が鍵となる。

食堂の見張りの一人が寝室ブロックの方へ行き、通路の見張りがそれぞれ左右の通路へ別れて食堂を出て行く。足を投げ出し、だらしなく姿勢を崩して座っていたアネットはそれらをぼくと眺めていたが、ふいに寝室ブロックに向かう見張りの後ろ姿にギョッと顔を引き攣らせ、そのまま凝視した。

その様子に気付いた見張りの傭兵は、慎重に彼女の視線の先を確認する。そこには寝室ブロックに向かって歩く仲間の後ろ姿。特に不審な点は見られない。訝しんで視線を戻そうとした瞬間、彼の意識は暗転した。

ほんの一瞬の隙に音も無く近付いたアネットが、彼の首筋に指を押し込んで意識を奪ったのだ。寢室ブロックに向かった見張りは、そのまま突き当たりで左右に伸びる通路を確認し、食堂の見張り交代すべく振り返ろうとした瞬間、昏倒した。二人目を片付け物音一つ立てず素早く食堂に戻って来たアネットは、まずレイスの枷を外しにかかる。

通路から足音が迫り、見張りが食堂に入ってきたのと枷が外れたのはほとんど同時だった。見張りの傭兵は仲間が倒れている横で捕虜の一人が魔術士の枷を外しにかかっているという光景に眼を睜り、声を上げて他の仲間知らせようとしたが、その瞬間、喉を突かれて咽る。すかさずトドメの一撃で昏倒させるアネット。

間をおかず反対側の通路からも見張りが入ってきたが、既に詠唱を行っていたレイスの氷結魔術によって一瞬の内に顔を氷漬けにされた。次いで手足も氷で固められ、もがく内に気を失つたらしく静かになった。アネットはそれを見て「えげつな〜」などと呟きながら、すぐさまフレイや他の者達の枷も外しにかかる。フレイは、アネットに対する猜疑をまだ拭えないでいたものの、さすがは密偵部隊の精鋭と認めざるを得なかった。

「陛下!」

「アネットか、早かったな」

寢室で軟禁されていたバルティアは、こうなる事が当然とばかりにアネットを迎えた。アネットは、信頼されているのか豪胆だけなのか判断に困るなあと苦笑しながらバルティアの枷を外した。「アルサレナ様、レティレスティア様、お二人ともご無事ですか」

別室に入ったレイスとフレイもそれぞれ二人の枷を外す。枷の鍵は三番目に倒した見張りの傭兵から奪ったものだ。ティルファの代表補佐官たちも自分達の主を解放し、皆で寢室ブロックの廊下に出て顔を合わせる。

昏倒させた見張りの傭兵達は外した枷で拘束した。後は貨物室の二人を何とかすれば、この竜籠は取り戻せる。問題は、先導するサムズの竜籠にこちらの竜の動きを牽制されている事だった。

ティルファの代表ブラハミルトが廊下の面々を見回し、ふと顔が足りない事に気付く。

「キトの髭オヤジはどうした?」

「いや〜あの人面倒だから事が済むまで放置しちゃおうかな〜なんて」

アネットが愛想笑いを浮かべてそんな風に答えていると、件の代表がいる部屋の扉が開いた。そして先程食堂を通過していった綺麗どころ親衛隊の女性剣士が現れる。

「あら? 皆さん何故ここに……?」

「ん? どうしたキルト、何かあったのかね?」

バレてしまったのは仕方が無いとばかりに、アネットはレイス達から鍵を受け取ってヨールテスの枷を外すため、部屋へと足を踏み入れた。

「いや〜さすがは皆さん、列強国の側近だけありますなあ。これなら無事に帰国できそうですね!」拘束された傭兵達を前に、踏ん返り返ってはしゃぐヨールテス。彼の事は捨て置き、アネット達は、貨物室にいる二人の傭兵とキトの綺麗どころ親衛隊のご婦人方をどうするか話し合っていた。

彼女らを入質にされたら元の木阿弥だ。またサムズの傭兵は、貨物室の二人の他に簡易竜籠の一台に乗る八人と、現在拘束している者達が乗ってきたもう一台に残る二人。それ等を加えると、戦力では依然としてこちらを上回っている。

「まずはこちらの竜籠を完全に制圧し、敵竜籠は魔術で追い払うしかないでしょうね」

「問題は貨物室の二人だな。侵入口になった上部扉付近にいる。二人同時に押さえねば、すぐに連中の仲間が乗り込んで来るぞ」

「入質さえ取られないようにして片方を仕留めれば、後はどうにかなると思うんだけど」

レイスとブラハミルトが、行動方針とそれを進める上での障害を挙げていくと、アネットがそれらの打開策を提案する。

こうした特殊な事態に的確な対応ができる者は、密偵叩き上げのアネット、騎士団での任務経験を持つレイス、戦略面に通じるブラハミルトの三人だけだ。

だがブラハミルトは、魔術を発現するために道具や材料を必要とする触媒型の魔術士なので、触媒が無ければ戦えない。その他、アルサレナは戦場での戦闘経験があるものの、どちらかと言えば防御系に特化した術者であり、バルティアは基礎的な戦闘訓練しか受けていない。またレティレスティアも実戦経験が無いので戦力にはならない。

つまり、現状で戦えるのはアネット、レイス、フレイ、ティルファ代表の補佐官一人。アルサレナには制圧後の護りを請け負ってもらおう。

「おお！ それなら僕に良い案がありますぞ！」

話の輪に入ってくるヨールテスに、アネットが胡散臭げな視線を向ける。だがそれに気付かぬ様子のヨールテスは、隅っこに立っていたキルトを呼んで『良い案』の説明を始めた。

「この娘を使って連中の気を逸らせばいいんだ！ 食堂からの差し入れたとか言って茶菓子でも持って近付き、奴等がそっちに気を取られている隙に魔術でドカンと！ あ、なんだったら茶に眼り薬を入れるというのはどうだ？」

これは妙案だと自画自賛しているヨールテスはひとまず放っておき、キルトを囮に使うという想定のもと意見を交わすアネットとブラハミルト。

「うーん……連中の錬度からしてまず手を付けないと思うし、もしかしたらあの子が近付いた時点で警戒するかもね」

「しかし、気を引く事は出来るな……幸い通路は二つある」

それにそろそろ通路の見張りがいない事を貨物室の二人に気付かれるかもしれない。迷っている時間はないと考えたアネット達は、その作戦で行く事にした。

左側の通路からキルトとアネットが貨物室に進み、途中アネットは通路の死角で待機。

まずお茶を持ったキルトが見張りに近付いて声をかける。レイスと、ティルファの代表補佐官二人は右側の通路から同じく貨物室に進み、タイミングを見計らって魔術を撃ち込む。

制圧後は上部扉からフレイの魔術でサムズの竜籠を追い散らす。上部扉は一人分の幅しか無いため、最も火力の高いフレイがその役に充てられた。その際、アルサレナが使役する精霊を使って結

界を張り、攻撃手のフレイとこちらの竜籠を、傭兵達の弓などによる反撃から護る。

「——精霊よ風の加護をこの者に——」

「わおっ、いいわねコレ」

レティレスティアから『風の加護』を受けると、アネットの身体が軽くなった。

「よし、では行こう。キルトといったね、よろしく頼むよ」

「はい」

お茶を載せたトレイを持って左の通路に進むキルト。気配を消したアネットがその背後に続く。二人を見送った後で右の通路に歩み出るレイスとティルファの代表補佐官二人。少し間を開けて、フレイとアルサレナも続いていく。

居残り組はレティレスティアとバルティア、ブラハミルト、そしてヨールテスの四人。だがヨールテスは少し休むと言って寝室ブロックの方へ引っ込んでしまい、残りの三人は食堂にて首尾を待つ事となった。

「式典以来ですな、レティレスティア様。貴女も何かとトラブルに見舞われるようで」

「ブラハミルト様も、此度は災難でしたわね」

レティレスティアとブラハミルトは以前、ティルファの式典でも顔を合わせている。その帰り、レティレスティアは帝国の特殊部隊に追われ、森で朔耶と出会ったのだった。

「こんな時に不謹慎かと思いますが、サクヤ殿について詳しい話をお聞かせいただきたい」

「サクヤの事、ですか……」

レティレスティアは少し迷ったが、サクヤが異世界から来た人間である事は既に母アルサレナから明らかにされているため、性格や嗜好程度の差し障りのない範囲で話に応じる事にした。サクヤが精霊と重なっていた事や、こちらの世界に戻って来ている事は伏せておく。

「サクヤは、不思議な方です」

その声に、壁際で腕組みをして立っているバルティアもしっかり聞き耳を立てていた。

貨物室の一角に身を寄せ合っているキトの綺麗どころ親衛隊の女性達は、見張りの傭兵に近付いていくキルトの姿を、ハラハラしながら見守っていた。

彼女達の中でキルトは、ヨールテス伯爵のお気に入りだが何かとそそっかしく、よく色んな男に誑かされては朝帰りをしている危なっかしい娘、で通っている。

「あの……お茶の差し入れに」

「ん？ 何だお前は」

「通路の見張りはどうしたんだ、こんな予定は聞いていないぞ」

訝しむ傭兵達を前にオドオドして見せるキルト。その時、何かに気付いたようにピクリと顔を上げた彼女は、お茶のトレイを投げ捨てると、胸元から取り出した物体を足元に叩き付けた。

そこから煙が噴出して一気に貨物室の視界を奪う。通路の死角から様子を窺っていたアネットは、彼女の突然の行動に狼狽する。

（な、何やってんのあの子！ こんな聞いてないわよ!?）

飛び出すべきか否か測りかねていたアネットだったが、突然背中に悪寒が走り、咄嗟に後ろへ飛ばす。数瞬前まで立っていた場所を冷たい気配が一閃した。その瞬間、アネットは裂かれた煙の隙間にナイフを持ったキルトの姿を認める。

まるで別人のような顔つきのキルトは、そのまま突っ込んで来て続けざまにナイフを繰り出す。アネットはそれを捌きながら、風の加護によって軽くなった身体で壁に向かって跳び、さらにその壁を蹴って反対側の壁、そして上方へと跳び上がって体勢を変えると、背後に回り込むように見せかけて天井を蹴った。

背後からの急襲と読んだキルトは身体を反転させながらナイフを振るう。だがその刃は空を切り、真上から降ってきたアネットに一撃を入れられた。

「ちっ」

ナイフを弾かれたキルトはすぐさま打たれた手を引っ込めると、相手の着地の瞬間を狙って斜め方向に蹴り上げる。アネットは着地した体勢からさらに身を伏せて蹴りを躲した。わずかに掠った服の背中が裂ける。キルトの靴の爪先からは、仕込まれていた暗器が突き出ていた。

ギリギリまで伏せていたアネットが全身のバネを使って前に飛び出すと、空振りしたキルトの蹴りが元の軌道に沿って振り下ろされた。構わず突進してその腿裏を肘で突き返しながらキルトの腕を取り、手首を掴んで背中に捻り上げようと密着すれば、キルトは身体を強引に押し込んでアネットを壁に打ち付けた。

さらにそのアネットの足をキルトの爪先の刃が狙うが、アネットは足を絡めてこれを阻止する。

アネットに半分腕を極められて動けないキルトと、暗器攻撃を防ごうとキルトに足を絡めているため動きの取れなくなったアネットの接近戦は完全に膠着した。

「なかなか上手く化けるじゃない」

「さすがは帝国の精鋭密偵部隊ね」

互いに一瞬の気の緩みも見せないまま軽口を叩き合う。そんな中、アネットは内心舌打ちしていた。キルトが敵方だったという事は、ヨールテスもサムズ側の人間なのかもしれない。あのある意味分かりやすい愚者ぶりは演技ではなからうか。

「うっふふ……ヨールテス様の事を疑っているのね？ ア・タ・リ」

「……」

肯定を返されてアネットは心の中で項垂れる。「一杯食わされた」と。

そして何となく、朔耶の事を思い出していた。

「よもや貴方がサムズに与していたとは」

「意外だったかね？ まあ、儂的にはサムズなぞどうでも良いのだがね」

貨物室の煙が上部扉から吸い出されて視界が戻る。そんな中、ヨールテスによって解放された傭兵達は、レティレスティアとブラハミルト、それにバルティアを人質にして、レイス達を捕らえようとしていた。外では、サムズの傭兵達が大型竜籠から噴き出した煙を訝しみ、竜籠を寄せてこちらの上部扉に弓を向けて威嚇している。

「キルト、こちらは片付いたぞ」

ヨールテスが声をかけると、左側の通路からアネットにナイフを突き付けたキルトが現れた。二人とも衣服の彼方此方が擦り切れ、肌が露出している。アネットは降参ポーズで肩を竦めながらバルティアの隣に立った。ヨールテスは二人の様子を見て面白そうにキルトに問う。

「随分と手こずったようだな？」

「ええ、思いのほか手強かったです」

「キトの代表である貴方がこのような行いに出るといふ事は、キトはサムズと共謀してフレグンス、ティルファ、グラントウルモスと刃を交えるつもりなのですか？」

アルサレナの問いにヨールテスはやや不遜な面持ちで笑うと、『さて、どこまで話しておこうか』と考え込む。そして謎かけをするように言った。

「此度の戦、サムズが勝てば、グラントウルモス帝国もフレグンス王国も、知の都ティルファさえも滅び去る。商人はただ武器と糧と媚を売り、大陸全土を買いだらう」

「すると、サムズが負ければキトも滅亡か？」

サムズを全面支援する事でキトはオールドリア大陸全土の覇権を狙っている、と解釈したブラハミルトの言葉に、ヨールテスは首を振って笑う。

「キトは群体の国だからな、表の支配者がしばらく裏に回るだけさ。誰も責任は取らんよ」

その返答にブラハミルトは眉をひそめる。『表の支配者がしばらく裏に回る』とは、現在のキトの支配者が建前上失脚して見せ、キトの存続を狙うという意味なのか、それとも単に身を隠して責

任を逃れるという意味か。

確かに、キトは政府の所在がはっきりしない特殊な体制の国だ。今回の戦でサムズが滅んだとしても、サムズに与した事について直接的な責任の追及や報復を受けにくい。

「まあ、お喋りはこの辺にして、皆さん部屋に戻っていただけどうか」

傭兵達を促して全員を食堂へ移動させるヨールテス。キトの裏切りによるまさかの結末に、皆口惜しそうな表情で歩き出そうとした時、突然竜籠が大きく傾く。

窓の外を、白と黒の翼が横切った。

朔耶の背に広がる二枚の翼。

朔耶をこちらの世界に喚んだ精霊の力は、朔耶の身体を包み、宙に浮かべる魔法障壁となつて白い光の翼を噴出させる。もう一方、黒い光の翼は帝都城の地下で契約した精霊によるもので、推進用の風を放つ。

茜色に染まり始めたオールドリアの空を飛んで来た朔耶は、前方に見つけた八体の竜と三台の竜籠に向かつて直進した。しかし勢いあまってそのまま竜達の間を通り、追いついてしまう。

「あああつ、行き過ぎた！」

慌てて反転する朔耶。

キャンプ場に向かう例のハイキングコースで精霊に願い、呼び掛けた朔耶は、再びこちらの世界にやって来た。その後、一緒に来てしまった兄と共にフレグンスの国境の街、カンタクルに赴き、

交感を通じてレティレスティア達の窮状を知った。

サムズの傭兵部隊に竜籠を制圧され、虜の身となったレティレスティア達。彼女らを救うため、ハイテンションなアニメオタク系の兄によるアドバイスも参考にしながら、工夫と発想力で精霊の力を解放した朔耶は、こうして空を飛ぶ事に成功したのだ。

竜達は尋常ではない魔力を放出しながら突然飛来した存在に驚き、急停止した。その影響で籠が大きく傾く。四頭立ての大型竜籠は一度揺れただけですぐに落ち着いたが、サムズの二頭立て竜籠は、主に兵士や物資を迅速に運搬するために造られた簡易型。言わば蓋の無い大きな箱を竜にぶら下げただけという造りなのでよく揺れる。乗っている傭兵達は振り落とされないよう必死で籠の縁にしがみ付いていた。

朔耶はそんな彼らに意識の糸を伸ばして絡めておくと、竜達の正面に浮く。帝都城にいた頃、時々厩舎に立ち寄っては見物したり餌やりをしたりしていたので、ゴツイ蜥蜴顔にも慣れたものだ。(うーん……とりあえず、やって見ようか)

兄のアドバイスに従い、朔耶は自分の中の精霊を通じて湧き出す力の流れに意識を向けると、蛇口を捻るように魔力の放出を行った。朔耶を包む白と黒のオーラの羽が、巨大な壁のごとく広がっていく。まるで『ここから先は通さない』と告げるかのように竜達の前に立ち塞がった。

竜は呼吸と同じ生命活動の一環として魔力を感じ、操る事が出来る存在だ。飛行の際も術など使わず、魔力による風を発生させて揚力を得、魔力の流れを自然の風と同じように感じ取る。それ故に朔耶が発する魔力の異常さを正確に認識できるのだ。

本能で悟る。『逆らってはイケナイ』と。

じろり。びくり。

睨みを利かせた朔耶に、首を引いて後退る飛竜。ようやく揺れの収まったサムズの竜籠に乗る傭兵達が、朔耶の姿を見て騒ぎ始めた。巨大な白と黒の光の翼を広げて行く手を阻む人間らしき存在にどう対処すれば良いか分からず、狭い籠の上で右往左往している。勇敢にも矢を射掛けようとした者もいたが、仲間を刺激するなど慌てて止められていた。

朔耶は竜達にも意識の糸を伸ばし、意思疎通を試みる。糸を絡めただけでも竜達は首を振ってキューキュー鳴いていたので、魔力だけでなく糸の存在も感知できるようだ。

『この場で待て、いいわね?』

こくこくと頷く八頭の竜。『竜って頷くんだけ』と妙なところに感心しつつ、朔耶は竜達から意識の糸を解き、傭兵達に意識を向けた。

次の瞬間、たくさんのカメラのフラッシュが焚かれたかのごとく、青白い閃光が乾いた音を立てながら連続して朔耶の身を照らし出す。

やがてそれが収まると、傭兵達は狭い籠の中で折り重なるように昏倒していた。とりあえずサムズの竜籠の竜達には、『捨てて来て』——つまり、一度地上に下りて傭兵達を降ろして来てと指示を出す。すると気絶した傭兵で満員になっている方の竜籠が地上へ下りて行く。

もう一台は倒れず傭兵二人を乗せたままこの場で待機させると、レティレスティア達の乗る竜籠を制圧している者達を追い出すため、朔耶は一度乗った覚えのある四頭立て大型竜籠に乗り込んだ。

大型竜籠の中では状況が把握しきれず、少し混乱が起きていた。

突然大きく揺れたかと思うと、唐突に何か濃密な気配が現れ、外からは傭兵達が騒いでいる声が聞こえた。その後、連続する乾いた音と青白い閃光。そして静寂。貨物室にいた面々はこの異常事態にそれぞれ感ずるモノがあった。

レティレスティアとアルサレナ、レイスとフレイは濃密な『気配』に覚えがあった。バルティアとアネットは連続する『乾いた音』と『閃光』に覚えがあった。ブラハミルトはこの濃密な気配が『巨大な魔力』である事を感じ取った。

そしてヨールテスとキルトは、その『巨大な魔力』が、そのような表現で済まされるレベルでは無い事に戦慄していた。二人は魔力を繋ぎ、吸い、溜め込み、消化する身体を持っているが故に、魔力そのものを従来の人間よりも正確に感じ取る事が出来るのだ。

一体何が現れたのかと警戒しているところに、貨物室の開いていた上部扉から、巨大な気配と共に小さな影が下りてきた。

噴出するオーラに白い衣を靡かせ、黒髪に黒い瞳を持ち、白と黒の光る翼を広げた少女。

そのあまりにも非現実的な気配と姿に、彼女をよく知る者達も声を発する事が出来ないでいた。

貨物室の中を見渡した少女は、レティレスティアの姿を見つけると片手を上げて微笑みながら言う。

「やほ、レティ。久しぶり」

どこまでも軽い、朔耶の挨拶。レティレスティアの中に歓喜が広がる。

「ああ……っ、サクヤ！」

「サクヤ様！」

「フレイも久しぶり、二人とも心配かけてごめんね？」

感極まったレティレスティアとフレイが朔耶のもとに駆け寄ろうとする。しかし、咄嗟に傭兵達に腕を掴まれ引き戻された。こんな尋常ではない気配を持つ存在に人質を持つていかれては、任務の遂行どころか自分達の命さえ危ないと判断したのだ。彼女達の様子から、あの存在と親しい関係である事は考えるまでもない。この二人を押さえている内はまだ有利に事を運べる、と。

乱暴に引き戻されて小さく悲鳴を上げるレティレスティアを見た朔耶は、ムツと不機嫌な顔をするとスタスタと歩み寄る。

「う、動くな！ この娘がどう——」

「邪魔」

カカアアン

薄暗い貨物室が一瞬青白い閃光に包まれ、誰もが目を眩ませた。視力が戻ると、そこには床に倒れふした傭兵達の姿。「相変わらず反則よねえ」というアネットの感嘆の呟きが聞こえてくる。今

度こそレティレスティア達と再会の抱擁を、と思っていた朔耶に、横から声をかける者がいた。

「いやぁ素晴らしいですな！ その魔力、その術！ 意識の糸をそこまで自在に操れるとは」

横に長い変な髭を持つ初老の男性と、所々破れているが豪華な衣装を纏った女性。朔耶は彼らが、精霊の視点になっていた時に見たキトの代表と警護の女性剣士である事を思い出した。『この髭は特徴的だなあ』などと思っている朔耶に、アネットが慌てて警告を発する。この二人が倒れていない事から、朔耶が彼らの裏切りを知らないと思付いたのだ。

「サクヤちゃん！ その二人も敵——」

「え？」

アネットが言い終わる前に、キルトが素早く抜き放った短剣で朔耶の喉を突いていた。

「ぐ……………こぶ……………」

しかし、かすかな呻きを上げて床に倒れふしたのはキルトだった。相手の魔力を吸い取り、体内に溜める能力を持つ彼女は、それを自分の意志で止める事が出来ない。そのため、魔力を噴出し続けている朔耶を短剣で突いた途端、朔耶の魔力が体内に流れ込んだ。そしてそれがあまりに膨大な量であったため、一瞬で許容量を超えてしまった。要は『潮れた』のだ。

意識の糸など、通常は目に見えぬ魔力の流れを視認する能力を持つヨールテスは、キルトから魔力があふれ出るところを見て、一瞬呆けてしまう。我に返って『しまった』と振り向いた先では、朔耶がキョトンとして突っ立っていた。

てつきり反撃が来るものと構えていたヨールテスは、そんな朔耶の様子にキルトの一撃が届いた

かとも思ったが、彼女の喉には傷一つ付いていない。

朔耶は全身に強力な魔法障壁を張っているので、短剣の刃どころか衝撃も届かない。たとえ魔術を撃ち込まれてもその影響を全く受けない状態にある。

基本的にただの一般人である朔耶には、プロの暗殺者であるキルトの動きは全く見えなかった。朔耶にしてみれば、目の前にいたと思ったら突然倒れられたようなものだ。

その力も反応も現象も、何もかも理解しがたい朔耶という存在に、ヨールテスは完全な手詰まりに陥った。故に、彼女から伸びる意識の糸が自分の首に絡まるのを、ただ呆然と見つめるしかなかった。

カカアアン

ヨールテスが崩れ落ちる。

朔耶は念のため、状況についていけず端っこで固まっている綺麗どころ親衛隊のお姉さま方に対して、意識の糸を通して心——表層意識のみだが——を読み取る。そうして彼女達が危険な存在ではない事を確かめた。

「サクヤ！」

全ての危険を排除した事を確認して魔力のオーラを解いた朔耶に真っ先に駆け寄り、その身を抱き締めようとしたのはバルティアだった。



「――精霊よ風の戒めをあの人に――」

「っ!」

肩口も露に、仄かな色気を漂わせる異国の白い服を纏った、心より焦がれる少女。その朔耶を胸に抱こうとした直前で、バルティアの身体が急停止する。その脇をふわりと金髪を靡かせて通り抜けたレティレスティアが、飛び付くように朔耶に抱きついた。そんな彼女を苦笑しながら迎える朔耶。

「……そこで精霊術はないのではないかと？ フレグンスの王女」

「貴方にサクヤは渡しませんから」

ぎゅっと朔耶を抱き締めながら、レティレスティアは王女の風格をもって言い放つ。それに対し複雑な表情を向けるバルティア。

それを見たアルサレナは溜め息を吐き、レイスとフレイはさもありませんと頷く。またブラハミルトは興味深そうな表情を浮かべ、アネットは通路に隠れて笑っていた。

「あははは……まあ、今はとにかくあの人達を降ろしちゃってカンタクルに急ごうよ。竜籠が二、三台もあれば援軍も早く送れるでしょ?」

朔耶はとりあえずこの場を収めて、話を進める事にした。

貨物室の後部扉を開け、気絶した傭兵とヨールテス、そしてキルトも一緒にサムズの竜籠に積み込む。彼らを地上に降ろして来るよう竜達に言いつけた朔耶は、続いて各国代表の皆に、精霊の視点で見たサムズ方面より来る傭兵団の大部隊の事を詳しく話した。

「サムズの大部隊がそんな近くに迫っていると……？」

「うん、あたしが見た感じだと三日くらいでカースティアに着くと思う」

「やはり、我々の推測より早く動いていたという訳か」

「少し早すぎる気もしますね」

バルティアとアネットは、エイディアス帝が討たれた前後に傭兵団がサムズに入った事、その規模から彼の国の動きを推測し、今回の会談にはそれを牽制する意味合いも含ませていた事を打ち明けた。

先代皇帝エイディアスがサムズと取り交わしていた密約。帝国からの資金援助を受けたサムズが、帝国と契約を結んだ傭兵団を自国の戦力としてまず迎える。その後、帝国がフレグンスに仕掛けた折に、サムズがフレグンスの背後を突くべく衛星国家であるクリューゲルに侵攻するというモノ。エイディアス帝が朔耶に討たれた事でこの計画は立ち消えになるはずだった。だが、サムズに帝国の侵攻を待たずクリューゲルに仕掛けようとする兆しがあったので、バルティアは会談を早めたのだ。

おおよその事情を知っていたアルサレナは、悪くない判断であったと一定の評価を下した。サムズと帝国の関係を理解したブラハミルトは頷き、ティルファはフレグンス、グラントウルモス側に立つと明言した。彼は、これがフレグンスとグラントウルモスの戦い、もしくはフレグンスの内戦であれば中立の立場をとるつもりだった。『サムズの勝利が三国の滅亡に繋がる』というヨールテスの言葉も、今回の判断を後押ししたと言える。

「キトの動きはどう見ます？」

「ふむ……ヨールテスも言っていた事だが、キトは群体国家とも言える、多数の集団が寄り集まった頭も尻尾もはつきりしない不定形な国だからな。奴の言う通り、当面の支配者が代わるだけで今まで通り何も変わらないだろう」

レイスの問いに対しブラハミルトはそう説明した。政治体制は未だ表立って確立されておらず、多くの商人と資産家が寄り集まり、いつ誰によって国の方針が定められているのかも分からない。一説には、キトに多数存在する各種ギルドの総元締めが中心的役割を果たしているとも言われている。

「そうなる、ヨールテスをあのまま逃がして良かったのでしょうか？」

「奴がキトの代表として送り込まれたのは、恐らく我々の確保が目的だったのだろう。つまりは、奴も『駒』の一つだ」

「いつでも切れる『尻尾』という事ですか。しかし……尻尾だと思っていたら実は頭だった、なんて事は？」

「無いとは言い切れん。だが、ここで身柄を確保しておいたとして、それでキトをどうにか出来ると思うか？」

確かに、とレイスは納得した。先程話した通り、当面の支配者が代わるだけだ。新しい支配者が方針をぐると変えて自分達に付く可能性も無くはないが、楽観的すぎる考えだ。

ともあれ、ここはフレグンス領でも東寄りの地域で、キトからは随分離れている。地上に降ろし

たヨールテス達が傭兵達を纏めて動いたとしても、精々クリューゲルに侵攻してくる傭兵団と合流する程度であろう。特に脅威にはならないと判断された。

そこまで話したところで、地上に傭兵達を捨てに行っていたサムズの竜籠が戻って来た。

「それじゃあ、竜達にはこっちの竜籠に付いて行くように言っておいたから」

「サクヤ、本当にカースティアに行かれるのですか？」

カースティアに残ったイーリスら各国代表団の護衛達を助けに行くという朔耶に、レティレスティアは心配そうな表情を向けた。

「うん、やれる事はやっとかないと。後悔はしたくないしね」

おもむろに歩み寄ったバルティアも朔耶に話しかける。

「あまり無理はするなよ、余はお前ともっと話したい」

「バル……ちゃんと頑張ってるどころ見てたよ、急に消えちゃってごめんね？」

「いや、余の不甲斐無さが招いた事だ……」

何やら親密な会話を交わす朔耶と帝国皇帝。二人を交互に見たレティレスティアの表情に別の不安の色が浮かぶ。そこへ、レイスが割り込むように声をかけた。

「サクヤ、少し待ってもらえますか。ほら、フレイ」

「……は、はい。あの……」

おずおずと歩み出たフレイは、俯き加減で申し訳なさそうな顔をしている。フレイとは再会の挨拶以外、まだ言葉を交わしていない。朔耶はフレイの性格とアネットに対する態度から、自分が攫

われた事を未だ気に病んでいるのかもしれないと思いつつた。

フレイは朔耶が光の翼を纏って現れた時、感極まってレティレスティア王女と同様に駆け出そうとした。しかしその後、彼女が圧倒的な力を振るって敵勢を排除し、各国の代表や王女、王妃達と対等に話し合う姿を見るうち、心の中で彼女に対する畏れ多さが膨らんでいった。つまり、あまりに大きな存在となった朔耶の前に、萎縮してしまっただ。

何を話すでもなくもじもじしているフレイに、朔耶は『これはこっちから動いてあげないと駄目かもしれないね』と歩み寄ると、いつか馬車の中でしたようにヌイグルミ抱っこを敢行した。

「うーん、相変わらずイイ抱き心地」

「さ、サクヤ様……?」

「フレイ? あんま深く考えちゃ駄目だよ?」

「でも……私は……」

「フレイがよそよそしいと、あたしは寂しいなあ」

「サクヤ様……分かりました。サクヤ様とは、今まで通りのお付き合いでござりまする」
若干気になる表現もあったが、朔耶はうむうむと満足して身を離れた。

バルティアが、朔耶を見て、レティレスティアを見て、フレイを見て、アネットを見て、そしてまた朔耶に視線を戻して呟く。

「そうか、サクヤが余に靡かぬは同性嗜好であったがためか……。しかし困った、性別ばかりはどうにも……」

「……何をやる」

「やかましっ！ この妄想おばか皇帝！」

ちよつと涙目でオデコを擦さすっているバルティアに、「あたしはノーマルだ！」と力強く宣言しながら後部扉の前に立つ朔耶。

「あーもう！ バルのせいでシリアスな出撃シーンがドタバタコメディになっちゃったじゃないの！」

「ふむ、何だかよく分かんが、リラックスできてよかったな？」

「むう……」

バシユツと朔耶の身体から白と黒のオーラが噴き出て光の翼が広がる。

「んじゃ、行つて来ます」

開かれた後部扉から見えるオールドリアの空には既に星が瞬またたき始めている。ふわりと身体を浮かせた朔耶は、黒い光の翼が起こす突風を纏まとって一気に飛び出していった。

第二章 光の翼

カースティアの大図書館二階では、会談が行われていた部屋の前の通路でフレグンス近衛騎士団このえきしだん、帝国精鋭騎士団、ティルファ魔術団が交代で襲撃者達と相對していた。

通路の両端には一階へと繋がる階段があるが、挟撃を受けないよう片方の階段と通路の一部を魔術で崩壊させて塞いである。両方塞げれば籠城ろうじょうもしやすかったのだが、片方を塞いでいる間にもう片方を制圧されてしまったのだ。

「一階は完全に占拠されたか」

「連中、ここを拠点にすべく街中から集まって来ているようだ」

「最初に仕掛けて来たのは傭兵団のようだな。サムズの自警団とは別の奴らだろう」

「サムズの独立派つて連中は、ただ頭数を揃えるのに集められただけだな」

襲撃者による何度目かの突入を退けつつも、各団の代表達が敵戦力を分析して話し合う。相手側に魔術士がいなかったため、先程までは近衛騎士団、精鋭騎士団が交互まぎに護りを固め、魔術団が援護する事で危なげなく撃退に成功していた。

しかし昼から続く連戦に、数で劣る味方は体力的にも精神的にも消耗しており、徐々にだか押されつつある。塞いだ通路からも、襲撃者達が瓦礫がれきの撤去作業を行う音が聞こえてくる。

「カースティア派遣騎士団の生き残りが態勢を立て直してくれば、援軍が来るまでは持たせられると思うのだが……」

「さて……、いささか厳しい状況ですね」

カースティアに元々駐在していたフレグンスからの派遣騎士団は、既に街人に偽装した武装集団の奇襲を受けて壊滅している。

「敵襲！」

「く……またか！ だが向こうも消耗しているようだな、攻撃の間隔が長くなってきている」

一本の通路上で行われる攻防。何度撃退しても、すぐに部隊を編成し突入を仕掛けてくる襲撃者達。ほとんどは大した腕も無い雑兵程度だが、時折傭兵のような手練がなだれ込んで来るので、一時も気を抜く事が出来ない。

「とにかく、ここは耐え抜くしかあるまい」

イーリスは刃の欠け始めた槍を握り直すと、回収され損なった敵兵の遺体が転がる防衛ラインの廊下に踏み出した。

大図書館の一階部分。そこは傭兵団とサムズ独立派グループで構成された武装集団に占拠されており、中央のホールは彼らの指令拠点として使われている。武装集団の中で司令塔の役割を担っている傭兵団の団長は、脱出した各国代表を追わせた分隊が戻らない事に苛立ちを募らせていた。

「竜籠はまだ戻らんのか」

「未だ連絡はありません」

「まさか落とされたのではあるまいな……」

彼らが戻り次第、クリューゲルに進撃中である仲間の傭兵団をこちらに輸送するはずだったが、肝心の竜籠がないのではそれも叶わない。このままでは彼らの到着に三日は要してしまう事になる。

さらにはこの襲撃に合わせて集まる手筈になっていたサムズ独立派が予定の半分も集まっておらず、未だ大図書館の制圧に至っていない。

サムズ側の戦略は、先行してカースティアに潜んでいた傭兵団を中心として決起。各国の代表を押さえ、あらかじめ連絡を付けておいた同じく潜伏中のサムズ独立派の少数グループを集結させ、彼らを纏めてカースティアを制圧。その後、傭兵団本隊の大部隊を送り込んでカースティアを防衛、フレグンスの反撃を抑え込む、という筋書きだった。

最初の奇襲を補佐するため、この武装集団にはサムズ独自の戦力である自警団も一部派遣されていたのだが――

「サムズ独立派の連中は何故予定通り集まらん。奴らでも数さえ揃えばそれなりの戦力になるとい
うのに」

「斥候からの報告に、ここへ向かう途中で襲撃を受けたらしき独立派集団の死体を見たとあります
が……」

「……ふむ。派遣騎士団の別働隊でもいたか……？ しかし、フレグンスの騎士団にそんな戦い方が出来るとも思えんが……」

フレグンスの騎士は正々堂々、真つ向勝負を挑む正統派騎士であり、戦いの専門家からすれば実に扱いやすいカモだ。だが、姿を現さず、移動中の小集団を各個撃破して回るような遊撃スタイルの部隊がいるとなれば、こうしてノンビリ構えている訳にも行かなくなる。

二階への突入には、傭兵崩れの多いサムズの自警団を時折交せてはいるが、近衛騎士団、精銳騎士団は手強いうえに、ティルファ魔術団の援護が厄介だった。

「ここで唸っていても仕方ないな。サムズの自警団には街周辺を巡回させて、残りの独立派集団の集結を急がせる。通路の制圧には我々が出る。斥候が戻り次第、臨時にこの指揮を執らせる」
「ハッ」

傭兵団の団長は、この大図書館の制圧が遅れる事で作戦全体に影響が出る事を懸念し、また若千の焦りもあつて自ら制圧に乗り出す事を決断した。

「次の攻撃で独立派の連中を一旦突撃させてすぐに下がらせる、入れ替わり我々が突入する。退路を間違わせるなよ？ 団子になつたら魔術の餌食だからな」

クリューゲルの中心地でもある繁華街は普段の賑わいも無く、ひっそりと静まり返っていた。街の治安を担っていた派遣騎士団は昼間の襲撃で壊滅状態にあるため、外を出歩く住人もいない。それ以前に、サムズの武装集団が大図書館周辺に集まる途中、時折徒党を組んで武具屋や飲食店などを襲撃しているので、皆家に閉じ籠もって息を潜めるしかなかった。

「静かだな、同志達は上手くやつてるようだ」

「既に街の制圧も終わっているようです。我々も武器を調達して早く本隊に合流しましょう！」

「あの店なんてどうだ？ 看板にキヤリゴルの紋章がある。良い武器が手に入るかもしれないぞ」

彼らはサムズ決起の報を受けて集まったサムズ独立派集団で、普段は個別にクリューゲルの郊外に潜み、時折情報収集と生活費稼ぎを兼ねた『石売り』——つまり魔力石を売りに街へ出向くという生活を送っていた。だが十日ほど前に、『近くサムズによるフレグンス侵攻の前哨戦としてクリューゲルの首都カースティアを攻略する』という大規模な軍事作戦の報せを受け、密かに仲間と連絡を取り合い、郊外に構えたアジトに潜んでいたのだ。

その内の一人が、早速ある店に押し入ろうと武器代わりに持ってきた丸太で扉を叩き始めると、他の仲間も付近に落ちている石や木材を拾つて来てはソレに加勢する。リーダー格の男は部下の働きを見定めるかのように腕を組んで、扉が破られるのを待っていた。

やがて扉が碎かれ、数人が店に押し入ると、中から怒号や悲鳴が上がる。物が倒れる音や陶器が割れる音が続き、命乞いの叫び等も聞こえてくる。そんな中、集団のメンバー二人が寝巻姿の少女を店から引きずり出して来た。店の奥からは主人らしき男の懇願する声が響く。

「頼む！ 武器は持つて行って構わない、娘は返してくれ！」

「いやあ！ お父さんっ、お父さん助けてえ！」

殴られたのか、額から血を流しながら足に縋りつく店の主を邪魔そうに蹴り飛ばした男達は、泣き叫ぶ少女の髪を乱暴に掴み上げると頬を張って黙らせる。

「リーダー、コイツを本隊への土産にしましょう」

「土産だあ？ お前らが食いたいたダケだろうが」

「相変わらず子供趣味な奴だなあ」

店の主人を無視し、商品の剣や槍、斧などを両腕に担いだメンバーとリーダー格の男が笑い合う。他のメンバーも持ち出された武器を物色しては装備を整えていく。

「あ、おいつ、ソレは俺が使おうと思っただ剣なのに」

「お前にキャリゴルはもつたいねえよ、こういう武器は人を選んだ」

剣術を齧った経験のあるメンバーが、そう言っただけで一番高価そうなキャリゴルという銘入りの剣を手に取り、刀身を確かめる。すると、どこからか挑発するような口調で嘲りの言葉が投げかけられた。「まあ、てめえみてえな小悪党が扱える代物じゃねえわな」

キャリゴルの剣を得意気に構えていた男が「何を！」と振り返った瞬間、彼の視界は大きく回って地面に落ちた。いつの間にか転んだのかと身体を起こそうとするものの、彼の意識はそのまま薄れていく。やがて首を失った彼の身体がゆっくりと倒れふした。

「あ……あわあ！ ガフツ……」

狙っていた剣を持つていかれて愚痴を垂れていた男は、仲間の身に起きた悲惨な出来事に恐怖の声を上げるが、同時に声ごと裂かれて仲間の後を追った。

「隊長！ エグイよお」

「文句言っただけで、さっさと済ませろぞ」

「そろそろ図書館から手練が来そうだしねえ」

「な、何だお前ら！」

いきなり仲間二人を葬られた集団のリーダー格の男が叫ぶ。屠った男は飄々とした様子で剣を払い血糊を飛ばすと、鼻で笑いながら答えた。

「何って、見りゃ分かるだろう？ おこく派遣騎士団だよ。俺は隊長のガリウスだ、短い間だがヨロシクな」

それを合図に派遣騎士団の甲冑で身を固めたガリウスの部下二人が、武装集団に飛びかかる。

小さな身体で自分の身長ほどもある大剣を操る童顔の騎士が、慌てて剣を構えようとした男を文字通り薙ぎ倒した。目の細いぼつちやりした温厚そうな騎士は、槍の先に斧頭が付いた斧槍を振り、もう一人の男の頭を兜ごと叩き砕く。

「ひっ……おい！ その娘を人質に……」

リーダー格の男は顔を引き攣らせながら振り返り、少女を捕らえていた仲間に声をかけるが——「ん？ こいつらに人質をとらせるつもりだったのか……それはすまなかったな」

冷たい目をした長身面長の騎士が、一突きで串刺しにした二人の男から血塗れの長剣を引き抜きながら言った。ほんのわずかな間に仲間の全てを失ったリーダーは、錯乱したように雄叫びを上げると、集合場所に向かって走り出す。

が、彼らがそれを許すはずも無く、斧槍で足首を払って転がしたところを大剣で地面に縫い付けるように貫いてトドメを刺した。

「おいつ、なんだ今の声は！ こっちから聞こえたぞ！」

少し離れた街角に傭兵部隊の姿を確認したガリウスは舌打ちする。

「ちっ、傭兵が出てきやがったか……おい、あんたらは早く家ん中入って戸締まりしてな」

荒らされた店の前でへたり込んでいる少女と店の主人に声をかけると、ガリウス小隊は傭兵達を巧みに挑発して路地裏へと誘導していった。

籠城する各国の護衛騎士団と武装集団との攻防が続く大図書館の通路の一角。

「よし、手筈通りに行くぞ」

部下達と作戦を確認し合った傭兵団の団長は、突入開始の合図を出した。騎士団の気を引き付けるためだけに組まれた部隊が突撃を敢行し、魔術団と騎士団の迎撃を受けて即座に撤退を始める。それを追撃しようとする前に出る騎士達に、イーリスの指揮が飛ぶ。

「深追いするな！ 固まって防衛に徹しろ！」

「団長っ！ 新手です！」

「あれは……傭兵団か！」

隊列が乱れた隙を喰い破るように急襲して来た傭兵団。

イーリスは後方で控える騎士達にも援護を呼びかけた。恐らくは相手の最強戦力が出て来たのだ。こちらにも相応の戦力で応戦せねば押し潰される。

事実、彼ら傭兵団の錬度は高く、戦闘力も先程までの突入に交じっていた傭兵崩れなどに比べて相当に高かった。

連戦による疲労は身体だけに止まらず、イーリスの振るう槍にも蓄積されている。何度目かの剣戟を捌いて鋭い突きで傭兵の一人を吹き飛ばしたと同時に、へし折れてしまった。

「くっ、武器が限界か」

「団長！ 使ってください！」

若い近衛騎士が自分の槍をイーリスに渡すと、予備の剣を抜いて戦闘に戻る。

受け取ったイーリスは、槍が折れた隙を狙って突っ込んで来た傭兵二人の頭を素早く打ちつけ、反した石突きで吹き飛ばす。さらに翻し、彼らの身体を穂先の刃で切り裂いた。

雷鳴のごとく凄まじい槍捌きに、さしもの傭兵達も怯みを見せる。

「さすがは噂に名高いフレグンス近衛騎士団長の槍捌き、ぜひとも差して手合わせ願いたい！」

傭兵団の団長は部下を三歩下がらせると、オールグレンの長剣を構えてイーリスの前に立った。

一騎打ちを申し込まれたならば受けねばならないのがフレグンスの騎士である。イーリスの部下達も三歩下がって決闘の舞台を整える。

「イザ」

「参る」

先手のイーリスが放った鋭い突きが、叩き下ろしからの薙ぎ払いに変化する。傭兵団長は合わせるように剣を振り下ろして相手の軌道を逸らし、槍の柄の上を剣の腹で滑らせて腕を狙う。イーリスはそれを一動作で弾き上げ、巻き込むように剣を絡め取るうとする。

傭兵団長は身体ごと反転させてそれをいなし、逆に打ち込んで来た。戦闘中に背中を見せるという

たトリッキーな攻撃法は傭兵ならではのものです、正統派の騎士からすればやり辛い。その反面、正面から打ち合うように隙を潰していけば、癖のある傭兵は手数が限られてくる。

疲労と他人の得物とで実力を発揮しきれないとはいえず、近衛騎士団長まで務めるイーリスと、生き残るための剣を極めてきた傭兵団長の一騎打ちは拮抗していた。しかし、この拮抗こそが傭兵団長の狙いでもある。

一騎打ちなど花形の騎士同士でやっていけば良い。傭兵団長には、時間稼ぎと相手の注目を引き付けておくという別の狙いがあった。そろそろ正面から打ち合うのもキツくなってきたかと、傭兵団長が少しづつ後退を始めた時、それは起こった。

「今だ！ 突撃しろ！」

「先に魔術士を狙え！」

封鎖していた通路の瓦礫が崩され、別部隊がなだれ込んで来たのだ。それに合わせて一気に攻勢に出る傭兵団。イーリス達は背後からの急襲に浮き足立ち、さらには前方から突撃を仕掛けてきた傭兵団を押さえるのに精一杯で、魔術団の援護にも回れない。

どうにか反応した精鋭騎士団が魔術団の盾となっているが、如何せん数が違い過ぎる。

傭兵団長とその部下の攻撃をギリギリで捌いていたイーリスが焦りを募らせる。

「このままでは……っ！」

「頃合だ！ アレを使え！」

傭兵団長が新たな指示を出すと、彼らの背後から新型ボウガンを構えた部隊が現れた。人の腕力

では短矢を番える事さえ出来ないほどの硬い弦を張り、より強力な射撃を可能にしたボウガン。一度発射すると、次に発射するまでかなりの時間を要する代物だが、それだけに一発の破壊力は凄まじい。

ガスンツという機械音と共に発射された鋼鉄の短矢は、騎士達の甲冑と中に着込んでいる帷子を易々と貫通して身体に突き刺さった。譬え致命傷は避けられても、甲冑を通して突き刺さった短矢は、動く際に生じる甲冑と身体とのズレによって肉を抉り激痛をもたらす。

撃たれた騎士達は皆動けなくなり、剣を構えて立っているだけで精一杯という状況に追い込まれた。

「騎士共の動きは封じたぞ！ 全員で討ち取れ！」

「おおおおおおお」

「く……ここま……レスティア……」

肩と脇腹に二発の短矢を撃ち込まれたイーリスはもはや槍を振るう事が出来ず、討ち取られるのを待つばかりの身となってしまった。レスティアの婚約者候補として在りながら、忙しさを理由にあまり構ってやれなかった事を悔やむ。

通路の中央、会議室の前まで押された近衛騎士団、精鋭騎士団、テイルファ魔術団が傭兵団と武装集団に呑み込まれようとしたその時、会議室の窓から何かが飛び込んで来た。

「わきゃあああああ……！！！」

ソレは凄まじい勢いで窓をぶち破ると、会議室の椅子や机を巻き込んで盛大に床を転がり、通路

まで飛び出して壁に激突したところで止まった。壁には大きく輝が入ってへこんでいる。

あまりに突然の出来事に、その場の全員の動きが止まった。煙を噴出しているソレは、ムックリと起き上がり身体に積もった瓦礫を。パラ。パラと落とす。

黒髪に黒い瞳、薄い白色の衣を纏った小柄な少女がそこにいた。

「さ、サクヤ……殿？」

キョロキョロしていた朔耶は声をかけてきたイーリスに気付くと、パッと顔を綻ばせた。

「あ、イーリス無事だった？」

「いや、それはこちらの台詞のような気がするのだが……」

面食らったイーリスは、傷の痛みも忘れて半ば呆然としつつ突っ込みを入れる。

時速百五十キロ近い速度で窓を突き破り、壁に激突したにもかかわらず、朔耶には傷一つ見当たらない。衣服にも破れ一つ無い。飛ぶために纏っていた強力な魔法障壁は、あらゆる物理的衝撃から身を守るため、壁に激突した衝撃も「あいたつ」で済む程度に軽減されていた。

「うわっ、なんか刺さってるし！ 大丈夫？」

近衛騎士、精銳騎士はいずれもボウガンの短矢に射抜かれて満身創痍となり、身動きがとれずにいた。ようやく硬直状態から立ち直った傭兵団が動き出して油断無く剣を構えると、他の武装集団も我に返って攻撃を再開しようとした。

床にペタリと座り込んでいた朔耶はそれを察して勢い良く立ち上がり、身体からふんわりと立ち昇らせていた魔力のオーラを派手に噴出させる。

「とりあえず、あたし 参 上 ！」

白と黒の光の翼が現れると、味方の騎士団や魔術団をはじめ、傭兵団や武装集団にもどよめきが広がる。突然乱入して来た得体の知れない少女を警戒して、武装集団は動くに動けない状態に陥ったが、傭兵団はどんな状況下でも攻め時を逃さない。

この少女の姿をした存在は確かに得体が知れず、人間離れした気配には畏怖にも似た脅威すら感じる。だが今は、当面の障害である騎士団を葬り去り、この建物を制圧する事が肝要だと判断する。傭兵団長が攻撃命令を下そうとしたその時――

「そして傭兵団含め武装集団の皆さん！」

朔耶が彼らに話しかけた。武装集団も傭兵達も、そして傭兵団長すらも声を発し損ねて朔耶に注目してしまった。その一瞬の迷いや発令の遅れが、致命的な失態に繋がる。

「オヤスミ」

カカアアアン！ カカカカカカカアアアアアアアン！

乾いた炸裂音と共に放たれた眼も眩むような閃光は、通路にいた皆の視界を奪った。

やがて視界を取り戻した騎士達が見たモノは、累々と通路に倒れ伏す傭兵団と武装集団の姿。一体何が起きたのかと混乱する彼らを優しい光が包み込む。

「ここで怪我をしている人全員に治癒を――」

朔耶が放つ精霊の治癒の光は、騎士団のみならず傭兵団や武装集団の傷まで無差別に癒し始める。騎士達は、短矢^{ポルト}を抜き取る最中にも片端から傷を癒し痛みも消していく強烈な治癒力に眼を瞠^{みま}り、魔術団はこの異常な治癒に膨大な量の魔力が使われている事を感じ取り、興味をそそられていた。「これでよしつ、下の階も片付けて来るから、ちよつと待っててね?」

そう言つて光の翼を広げたまま階段をひよいひよい降りていく朔耶の姿を、騎士団の面々は呆けたまま見送つた。一方、畏怖^ふと驚愕^{おどろ}から早々に抜け出し好奇心を刺激されまくつていた魔術団の面々は、一階の様子を見物すべく階段付近へと我先にと詰め掛ける。

どよめき、閃光^{せんこう}、静寂。それで終わった。本当に『ちよつと』待たせるだけで戻つて来た朔耶に、騎士達は動揺しどう接すれば良いのか分からないままに彼女を迎える。

「あ、あの……本当に、サクヤ殿……なのか?」

「うん、あ……やっぱ怖い?」

「あ、イヤそのつ、我々は決してそんな!」

「あくいいいよいよ、レティ達も最初は何か怖いモノ見る目で見てたもの」

さもありません、さもありませんと手をヒラヒラさせて笑う朔耶に、イギリスは急に恥ずかしくなつて頭を下げた。

「申し訳ない。騎士の身に在りながら、命の恩人を恐れるなど……」

「だくからいいつてばあ、しょうがないよコレばかりは。あたし自身これは異常だと思ふもん」

「みんな助かつたんだから良かった良かったで良いじゃん」と軽く流す朔耶に、他の近衛騎士^{このえきし}も「あ

あ、やはりサクヤ様だ」と自分達の知っている彼女がそこにいる事を実感した。

「それより大変な事。サムズから大部隊がこつちに向かつてるの」

朔耶は大勢の気絶した捕虜を拘束する作業を手伝いながら、サムズから侵攻中の傭兵団の大部隊について語るのだった。

街へ略奪に出ていた武装集団は、拠点となつていた大図書館に戻つてくるなり電撃で昏倒^{こんどう}させられ、次々と拘束された。かくして、カーステイアの大図書館におけるサムズの武装集団の襲撃は鎮圧され、捕虜となつていた図書館の職員達も無事解放された。

そんな中、遊撃活動をサムズの自警団を片付けたガリウス小隊が大図書館にやつて来た。

「おいおい、どうなつてんだこりゃ」

「まさか護衛の騎士団だけで撃退しちゃつたの?」

「いや……ありえないだろ、それは」

「隊長、あそこに近衛隊がいるよお」

大勢の捕虜で埋め尽くされた図書館前広場を見渡しているガリウスに、部下のぼつちやり騎士がある一角を指し示す。そこには現場を指揮する近衛騎士団長イリスの姿。

とにかく状況確認をしようとそちらに足を向けたガリウスは、この殺伐^{ころばつ}とした現場に場違いな格好で立つ存在に眉をひそめた。白い薄手の衣を着た黒髪の小柄な少女が、近衛騎士団長と何やら話しているのだ。